

聖書:第一列王記16章21～34節

説教:主の怒りを引き起こす

はじめに

今では独立した国であれば、そこに元首とか大統領と呼ばれる人や、あるいは皇帝や王さまがトップに立って国を治めることが普通です。しかしイスラエルはそうではなかった。祭司と呼ばれる人が神と人々との間に立って国を治めていく、そのような政治スタイルをとっていましたので、人間としての王さまを立てることはもともとなかったのです。ところが、周囲の国から国境を越えて盗賊が襲って来るようになり、困り果てた長老たちが祭司に王様を是非立てて欲しいと願ったことがきっかけで、神が王となる者を指名して王を立てるようになった。そのようにして最初の王となったのサウルでした。そんな事情ですから、なりたいたいと思った人や力ある者が王になるのではない。あくまでも神が王となる人物を指名して初めて王の座に座ることが許される。それが基本だったのです。

ところがソロモンが亡くなった後、王の座を巡って権力争いをするようになり、神が王を指名するという考え方はどこかに吹っ飛んでしまう。その結果、とうとう国は二つに分裂してしまうほど混乱していきます。今回は北王国イスラエルの三人の王のことは見ました。今日はその続きで、ここにはオムリとアハブのふたりの王が登場します。どこを見てもすばらしい恵みというものが見当たらない。でもここにも神の恵みが記されているはず。それはどんなことなのか見てまいります。

1 ふたりの王

1) オムリはサマリアを首都とする

まず最初に登場するのがオムリです。彼はすんなりと王になったわけではなく、ティブニというもう一人の有力な人物がいたために四年ほど勢力争いを繰り返していたようです。そのティブニが亡くなった正式な北イスラエルの王と認められていきます。その彼がしたことが、24節に書かれています。個人が所有していたサマリヤの山を買い、そこに町を建て、北王国の首都に定めた。おそらく外から敵に攻められたときに備えて、地形的に堅い守りを築きやすかったのだろうと思われます。

オムリがしたことはもう一つあって、25、26節にこうあります。「オムリは主の目に悪であることを行い、彼以前のだれよりも悪いことをした。彼はネバテの子ヤロブアムのすべての道に歩み、イス

ラエルに罪を犯させ、彼らの空しい神々によってイスラエルの神、主の怒りを引き起こした。」

ヤロブアム以来の歴代の王たちに比べても、オムリは主を捨ててほかの神々を拝むひとときわ悪い王であったと評価されています。

2) アハブはサマリアにバアルの祭壇を築く

そんなオムリが亡くなり今度は彼の息子のアハブが王になります。彼の評価は30、31節でこう書かれています。「オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも主の目に悪であることを行なった。彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであつた。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻とし、行ってバアルに仕え、それを拝んだ。」

オムリは、彼以前のだれよりも悪いことをしたと言われていましたが、その息子はもっと悪いことをしていく。具体的には、外国からイゼベルと呼ばれる女性を妻に迎え、イゼベルが信じていたバアル神を喜んで拝んでいったことを指します。このことがこの後大きな事件に発展していくのですが、そのことはまた来週以降触れることになると思います。

2 ヨシュアの預言

1) エリコ陥落のとき

今日の箇所をざっとまとめればそのような内容です。ところが34節にまるでとってつけたようなことが書かれています。「彼の時代に、ベテル人ヒエルがエリコを再建した。彼は、その礎を据えたとき長子アピラムを失い、門を建てたとき末の子セグブを失った。ヌンの子ヨシュアを通して語られた主のことばのとおりであつた。」

おそらく目で読んでいるときは、何かなと思いつつながらそのまま見過ごしてしまうような節です。しかし読み飛ばすわけにはいきません。何か意味があるはず。それは、

ヨシュアが語った主のことばとはなにか。話は、イスラエルの民たちがヨシュアに導かれて、約束の地カナンに入るためにヨルダン川を渡った頃にさかのぼります。川を渡ると目の前には城壁で堅く囲まれたエリコという町があり、イスラエルの人々がやって来たことを警戒して、堅く門を閉ざしています。難攻不落と思われていたエリコを占領しなければ前に進めません。そこでヨシュアは祭司たち

に、七日間毎日城壁の周りを七回ぐるぐる行進し、七日目には角笛を吹き鳴らしときの声を上げるようにと命じる。そうしたら城壁が崩れ落ち、エリコを攻め落とすことができた。そのときヨシュアが語ったことばがヨシュア記6章26節にある。「この町エリコの再建を企てる者は主の前にのろわれよ。その礎を据える者は長子を失い、その門を建てる者は末の子を失う。」

ヨシュアとアハブの時代とはおよそ550年も時間の隔たりがあります。たとえば織田信長が語ったことばが今この時代に実現するようなものです。そのことだけでも驚きます。なぜヨシュアはこのようにことを語ったのか。そしてなぜヨシュアの預言が今このときに成就するのか。そのことを考える必要があります。

2) のろい

ヨシュアは、「この町エリコの再建を企てる者は主の前にのろわれよ」と言っています。なぜそう言ったのか。町の門を固く閉ざし、自分たちを絶対に受け入れようとしなかったその腹いせに吐き捨てるように言ったのか。そうではないと思います。ヨシュアは警告しているのです。どんなに城壁を固めても、主に逆らうことは絶対にできない。主のみこころだけがなっていくのだ。エリコの再建を企てる者とは、この場合、主に逆らおうとする者という意味で使っている考えた方がよい。

3) 罪に対して鈍感になっていく

そうしますと、ヨシュアのことをどうしてここに置かれているのか、前後とつながりが見えてくる。25節でオムリは彼以前のだれよりも悪いことをしたと言われ、30節でもアハブは彼以前のだれよりも主の目に悪であることを行っただけと言われる。そんなふうにとどろき悪い方向に向かっている。そんなときにエリコを再建しようと企てる者が現れました。ベテルは、ヤロブアムが金の子牛を造りそれを拝む立派な祭壇があった町です。ベテル出身のヒエルは何も疑問に思わず、ごく自然にエリコの町にもそのような施設があれば便利にだろうと考えて町の中に祭壇を築いた。ヨシュアが語ったことなどとうの昔に忘れ去られていた。それくらい罪に対して鈍感になってしまっていたのです。そのようなことをオムリとアハブがした。ヒエルの家族に起きたことが象徴的に表していたのです。

3 主の怒り

1) 神はなぜ怒るのか

そんな民たちに対し神はどうしたか。26節で「イスラエルの神、主の怒りを引き起こした」、33節で「ますますイスラエルの神、主の怒りを引き起こすようなことを行っただけ」とある。

このようなところを読むと、怒る神はきらいだと思ふ方もいます。でも、なぜ神は怒らなければならないのかを考えてみる必要があります。

例えば小さな子どもが赤信号で渡ろうとしたら、母親はどうしますか。なにもしないでニコニコしていますか。そんなはずはない。すぐに厳しく叱るでしょう。叱られた子どもにしてみれば一瞬、お母さんは怖いと思うかもしれないけれど、叱ることが子どものいのちを救うことになる。神も同じです。神が怒るのは、言葉を変えれば、それだけ私たちのことを心配している現れです。強い関心があるから叱る。どうなっても知らないというのなら、こうはしません。神はどこまでも愛し続けます。

2) イエスとサマリア

いったいどこまで愛し続けるのでしょうか。オムリはサマリアの町を建て、アハブはそこにバアルの神殿と祭壇を築き、やがてバアルの預言者たちを養成する神学校まで作り、サマリアは異教の神々の中心地になっていきます。神が何度も警告してきたのに、直そうとしない。ここまでひどいことをしてしまうと、後は勝手にしてください、もう知りませんと言って普通はさじを投げてしまうところです。でも神はさじを投げません。アハブの時代からおおよそ850年後、イエスはサマリアを訪れ、ヤコブの井戸の傍らに座られて、水を汲みに来た一人の罪深い女性を救いに導くのです。もし神がサマリアを見捨てておられたのなら、このようなことは絶対にするはずがありません。

またイエスが死からよみがえられ、弟子たちの前に四十日間現れた後、天に上げられる直前にこのように語っていました。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となります。」（使徒1章8節）

神の救いのご計画の中にサマリアが入っていなかったなら、サマリアの全土とは言わずがありません。主の怒りを引き起こすほどの悪いことをしたサマリアの人たちでも、神の救いの恵みは注がれているのです。

3) 主のみことばは必ず実現していく（過去と未来）

では、その救いの計画はいつ始まったのか。そのときどきの思いつきとか、偶然の出来事としてたまたまのように救いのみわざを成してくださる、ということか。いいえ、そうではない。ヨシュアがエリコについて語った主ののろいのことばはいつ成就したか。およそ五百年以上も経ってからです。

ヤロブアムの前で神の人がさばきのことばを語ったことがありました。ヨシヤとばれる王が来て、この偶像の神々に仕える祭司たちの骨がこの祭壇で焼かれる、と預言しました。その主のことばはおよそ三百年後に現実となりました。

イザヤ書45章23節前半にこう書かれています。「わたしは自分にかけて誓う。ことばは、義のうちにわたしの口から出て、決して戻ることはない。」主が一度語ったことばは、必ずそのとおりになっています。だから、ヨシュアのことばが語ったことがそのとおりになり、神の人が語ったとおりのことが起きていく。

これが私たちの希望です。神のみことばは必ず実現するのですから、私たちは失望する必要がないということになる。たとえ今、自分のいのちが終わろうとしても、私たちは何も恐れる必要がない。必ず主は、約束したとおりにこの私のからだを新しいものに変えてくださり、新しいいのちを与えてくださって、天の御国に迎えてくださる。そう信じられる。

神は、どこまでも私たち追いかけて、救おうとしてくださいます。そこには過去と未来の二つの意味が込められている。一つは二千年前の過去に起こった十字架の救いが、私たちの背中から追いかけてきている。もう一つは、今度は反対の方向です。主がもう一度来てくださって完全な救いを与えてくださるという未来の約束が私たちの前に置かれている。

そのような主の恵みが私たちの後ろと前を囲んでいることに感謝します。